山陰における日朝関係史（Ⅰ）

内　藤　正　中

はじめに
1. 古代山陰の日朝関係史
(1) 神話にみえる交流
(2) 渡来神を祀る神社
(3) 考古学を通ずる検証
(4) 新羅に対する緊張関係
(5) 新羅からの山陰海岸漂着
2. 中世山陰の日朝関係史
(1) 倭寇禁圧の要請
(2) 朝鮮王朝との通交
(3) 秀吉の朝鮮出兵と山陰
(4) 強制連行と唐人窯
3. 近世山陰の日朝関係史（以下次号）
(1) 善隣友好の朝鮮通信使
(2) 朝鮮通信使と山陰地方
(3) 幕府の漂着朝鮮船対策
(4) 山陰海岸での漂着者救助
(5) 米子の竹島一件と浜田の竹島事件
(6) 山陰地方からの朝鮮漂着
4. 近代山陰の日朝関係史

はじめに

地域史研究に対する国際的視野からする見直しが急がれなければならない。日本の歴史全体についても，「一国史的理解」をこえた「世界史認識」が求められている。

日本にとって一番近い外国は大韓民国であり，朝鮮民主主義人民共和国である。古くから山陰においても「一衣帯水の地」といわれて，日本海を中にはさんで対岸に位置する地理的な「近さ」が強調されつづけてきた。従って当然のことながら，原始・古代から人と物の交流を通ずる深いかかわりがあり，山陰の地域史を特徴づける役割を日朝関係史はもっていたはずであるが，山陰の地域史研究のなかでは，朝鮮との交流とその影響についてはほとんど解明もされず，欠落したままになっている。

例えば，昭和43年（1968）に編さん刊行された島根県による『新修島根県史』

である。それは戦後歴史学の研究成果を集大成したかたちで編さんされたものであるが，当時の研究動向を反映して，日本史全体の動向と地域史の関連については最大級の配慮を払ったとはいうものの，アジアの歴史のなかでの位置づけはほとんど果たされないままで終っている。古代史についていえば，「渤海国使の来着」「新羅に関する緊張」の項目はみることができるが，出雲神話にかかわってスサノオが新羅の曽尸茂梨の地から来船してきたという『日本書紀』の一書にある記述についての言及はなされていないし，渡来神の存在は完全に欠落している。中世では「元寇」だけが記してあるにすぎず，近世については何らの記述もなされていないのである。

近代篇では，「遠洋漁業の発展」「対岸貿易の発展」の項目で，「韓海出漁」や「島根県の対韓発展」「日鮮定期航路の開通問題」「満鮮貿易調査会の設立」など，明治末期（1900—）の対韓進出については記されているが，そのことと表裏の関係をもつ植民地朝鮮からの労働者の流入，そして在日朝鮮人の形成にかんする問題点については，何らの言及もなされないままで看過されている。なお現代篇では，「李ラインと竹島問題」が記載されてあるだけである。

本稿では，欠落している朝鮮との関係史に焦点をしぼって，さしあたって史料を集めて各時代ごとの概観を与えることにより，今後の研究のための基礎作業としてゆこうとするものである。

1. 古代山陰の日朝関係史

(1) 神話にみえる交流

海の道は，誰でもが自由に往来できた交通路であった。山陰の北に広がる日本海は，古代にあっては政治・経済・文化など，あらゆる面での国際交流の広場になっており，日本海を通じて朝鮮半島の先進文化が日本海沿岸地域に伝来し，外来の先進文化を直接的に受容した山陰では，日本列島のなかでも独自の地域文化をもつ「出雲」をつくっていったのである。

出雲の位置は，陸路で大和の都に行くよりも，海路を使って北九州や朝鮮半

島に往来する方が，近くもあり便利でもあった。従って，大和の影響を受けるよりも，北九州や新羅の文化が滲透することの方が容易であったのが出雲であったといえる。とりわけて対岸の新羅からは，潮流に乗って船を漕ぎ出すと自然に出雲に着岸するわけで，韓国の学者も，古代に慶尚道―木出島―風島―欝陵島―隠岐―出雲というコースがあったことを指摘している。[1] それだけに朝鮮半島と出雲との間の交流には想像以上のものがあったと思われ，出雲の地を舞台とする神話には，対岸に位置する新羅との深いつながりがあったことを教えてくれるし，新羅の神話のなかでも，新羅人の倭への移住について語られている。

733年に出雲国造出雲臣広嶋を編纂責任者にして勘造された『出雲国風土記』には，記紀には記されていない出雲の国づくり神話が，「国引き説話」として物語られている。すなわち八束水臣津野命が，出雲国は幅の狭い布のように細長く未完成な若国である，初めに小さく作られていたので自分が大きな国にしてあげようといって，海の彼方の四か所の地から国引きをする。いずれもが「国の余りありやと見れば国の余あり」ということで，土地が余っていると思われるところをもらって，土地が不足している出雲の国土に継ぎ足そうというものであった。そこで一番初めに国引きをしたのは，「栲衾志羅紀（たくぶすましらぎ）の三埼（みさき）」であり，それでもって「去豆（こづ）の折絶（たえ）よりして，八穂米支豆支（やほしねきづき）の御碕（みさき）」をつくったという。新羅の国の余りを引いてきて出雲大社が鎮座する杵築の地をつくったというこの説話は，新羅人による出雲への渡来と定住を物語るものといってよい。[2]

大和の中央政府で720年にまとめた『日本書紀』では，須佐袁命（すさのおのみこと）が天つ神として出雲の簸の川上にある鳥上の峰に天降ったこと，そして韓鋤（からさひ）之剣で八俣大蛇（やまたのおろち）を退治したことを記している。『古事記』にも素戔嗚尊（すさのおのみこと）として同じような説話があるが，『日本書紀』には「一書によると」として，須佐袁命は五十猛命（いそたけるのみこと）とともに新羅国に天降り，曽尸茂梨（そしもり）の地に住んでいたが，埴土（はに）で舟をつくり海を渡って出雲に到ったとある。曽尸茂梨は，新羅の都であった慶州の地である

とされており，水野佑氏によると，八岐大蛇の説話についても，慶州盆地を流れる兄江流域の溪谷につくられていた六村にはじまる新羅の建国神話にもとづくものとも記している。[3]

記紀のスサノオ神は，『出雲国風土記』においても，神須佐能袁命として意宇・大原・飯石の三郡で登場する。新羅からの渡来神が，西出雲の須佐郷を本拠に定めて，斐伊川・神門川に沿って奥地に入って土着したものと思われるが，子神たちは，島根半島を中心にして宍道湖を囲むかたちで，島根郡(2)，秋鹿郡(2)，神門郡(2)，意宇郡(1)，大原郡(1)と各郡に分布している。

対岸の新羅の建国神話は，『三国史記』や『三国遺事』にみられるところであるが，そこでも倭―日本国との往来について記述されている。

新羅の始祖とされる赫居世王は，瓠のような大卵から生れたとされている。この王の時代に，その族姓は明らかではないが，もとは倭人であって瓠で腰をつないで海を渡って来た人がいた。王はこの倭人を瓠公と名づけ，馬韓に遣わして礼物を王に届けさせたという。

同じ『三国史記』には，新羅第四代の脱解王のことがある。王は倭国の東北一千里にある多婆那国の生まれで，その国王が女王国の王女を妻としたが，七年目に大卵を生んだので，国王は不吉だとして卵を捨てさせた。その卵は海に流れて金官国を経て辰韓の阿珍浦に流れついたところ，老婆に拾われ，卵の中から生まれた子が育てられ，のちに脱解王になったと伝えられているという。この説話については水野佑氏は，多婆那国は丹波国であり，「倭国すなわち北九州から日本海を渡ること東北へ一千里」とは，石見か出雲に当たるとみている。[4]

『三国遺事』には，延烏郎（ゆんおーらん）・細烏女（せいおーにょ）の説話がある。新羅の阿達羅王の4年(157)，東海（日本海）の浜で延烏郎が岩の上で海藻をとっていたところ，岩がそのまま流れて倭に行ってしまった。倭ではこれは常人ではないといって王にした。その後，妻の細烏女も岩に負われて倭に渡り，相会して王妃となった。ところが新羅では，突然に日月が光を失なったので，日宮に尋ねたところ，日

月の精が倭に行ってしまったためだと答えた。そこで人を倭に送って延烏郎の帰国を請うたが，天がこの国に送ったのであるから帰れない，身代りに王妃が織った絹をくれるから，それを持って帰って天に祭れといった。そこでその絹を持ち帰って天を祭ったところ，日月の光がもとのようになったという。その祭天の場所が迎日県であった。この説話について金元龍氏は，「延烏郎夫婦は新羅の日月神・天神であり，新羅から日本（迎日湾から恐らく出雲地方）に渡っているのである。これは新羅人の太陽崇拝に関わる説話かもしれないが，新羅人の日本移住を反映する新羅側の伝説でもある」と述べている。(5)

(2)　渡来神を祀る神社

新羅からの渡来神を祀る神社は，村山正雄氏の研究によると，『延喜式』神名帳では134社を数えるという。(6) 国別では出雲の11社がもっとも多く，次いで近江の10社，そして大和・伊勢・越前・能登の各8社などである。いずれも朝鮮半島からの渡来人が多かったといわれる地域であるが，なかでも出雲が，渡来神を祀る神社数で傑出していることは注目されなければならない。

出雲の神社について村山氏は,「大陸の地名に関係ありと推測させるもの」として，韓国伊太氐神（からくにいたて）を祀る6社（玉造湯，揖夜（いや），佐久多，阿須伎，出雲，曽枳能夜（そきのや））のほかに，生馬（いくま）神社，許曽志（こそし）神社，佐陁（佐陀）神社をあげる。また「大陸関係の人名とのつながりを推測させる」神社としては，宇留布（うるふ）神社，阿利神社があり，「職能に関係ありと推測せられるもの」としては，韓竈神社，筑陽（調屋）神社をあげている。

『延喜式』の神名帳は，中央政府の特定の意図によって編纂されたものであり，全国で3,132座の天神地祇を収録したにすぎない。従って石見国の韓神新羅神社や五十猛（いそたけ）神社，出雲国で五十猛命を主神とする伊賀多気神社など，渡来神を祀る神社などは掲載されていないのである。なお，収録されている韓国伊太氐神社の場合も，意宇郡の三座は，「同社坐韓国伊太氐神社」と記され，右の社に合祀されていることを意味しているし，出雲郡にある三座については，「同社韓国伊太氐神社」とあり，右と同じ名の神社として独立社で鎮座してい

ることを示している。このことは，風土記の時代には独立社であったものが，200年を経過した後の延喜式の時には，半分のものが合祀社になったことを明示するものである。このなかで現存するのは，揖夜神社（八束郡東出雲町）と曽枳能夜神社（簸川郡斐川町）境内にある二社にすぎない。

このほかに『延喜式』神名帳で朝鮮関係神社として山陰にあるのは，隠岐国で天佐志比古命神社，比奈麻治比売神社，因幡国では都波奈弥神社，槻折神社である。[7]

(3) 考古学を通ずる検証

弥生時代に稲作がはじまり，青銅器や鉄器が使用されるようになるが，日本の弥生文化は，朝鮮半島からの集団的渡来によって，まず北九州地域にもたらされたとみられている。

出雲国では，大社町の原山遺跡から朝鮮系の無文素焼土器が出土，出雲市の矢野遺跡からは鉄製農工具が出土し，早い時期から出雲では朝鮮半島の先進文化を受容していたことが明らかにされている。また，358本の銅剣に，6個の銅鐸，16本の銅矛が一括埋納されていた斐川町の荒神谷遺跡についても，朝鮮からの渡来による移住民の製銅技術集団の存在が想定されている。[8]さらにまた，弥生後期から出雲でみられる特徴的な四隅突出型墳丘墓について，その起源が高句麗に求められるとする説が，朝鮮民主主義人民共和国での発掘成果にもとづきながら述べられていることも注目しておかなければならない。[9]

以上のように，出雲の古代文化が朝鮮半島からの進出文化を直接的に受容することによって，大和とは異なった特色をもって発展したことは明らかであるが，朝鮮半島においても山陰系の土器が出土していることは，山陰との間で相互交流があった事実をうかがわせてくれるのである。このことについて小田富士雄氏は,「古代出雲文化における大陸諸地域との交流」をテーマにした環日本海松江国際シンポジウムにおいて,「文化交流と申しますのは，大勢としては朝鮮半島，あるいは中国からという流れですが，実はこのような一方的なものばかりではないわけです。九州系の文物というものは，弥生の中期頃に朝鮮半島

にも点々と発見されているのですが，やがて古墳時代に入った頃になりますと，山陰系の土器も一つか二つ，朝鮮半島に出てくるということが注意されてまいります」と指摘している。[10]

さらに古墳時代になると，山陰が新羅と直接交流していたことを示す遺物も発掘調査のなかで確認されている。米子市陰田遺跡から出土した6世紀後半から7世紀前半までの時期のものと思われる土器には，全国でも珍らしい文字が刻まれたものがあり，これについて前述シンポジウムで西谷正氏は，「この山陰地方には比較的古く，文字が入っていて，しかもそれは朝鮮との係わりがあるんじゃないか」として，「独自の交流によって朝鮮から出雲の地にもたらされた物もあるんじゃないか」と述べている。[11]

さらに，7～8世紀における山陰の古寺跡から出土した新羅系といわれている瓦について，小田富士雄氏は「ほとんど九州とは別系統でございまして，他の地域でも余り見られない様な，山陰独特という様なタイプの新羅系の瓦が分布しておるわけなんです。だから瓦の系統からいいますと，九州経由ではもちろんない，畿内経由でもない，恐らくこれは直接新羅との交流で出て来る物であろうと考えております」と，山陰と新羅の間の独自の直接交流の結果であることを明らかにしている。[12]

663年に百済復興軍救援の名目で朝鮮半島に出兵した日本水軍に対して，新羅と唐の連合軍は白村江において壊滅的な打撃を与えて百済を滅亡させた。しかし5年後の668年には，新羅から日本に使節を派遣して国交の再開を求めたことから，以来799年までの111年間に新羅からは45回，日本からは31回の使節が往来した。

ただし，その一方では新羅と日本との間の緊張関係は強まっていった。722年には日本の進攻に備えて新羅の毛伐郡に新しい城が築かれ，731年には300艘の日本水軍が東海岸を襲撃して撃退されたことなどが，新羅の史料にはみられるのである。[13] 日本側の史料でも，732年には新羅の進攻に対処するためにとい

う理由で，山陰・西海・東海・東山の四道に節度使が任命されたことなどが出ている。[14] こうして779年の公的な関係断絶に至るまで，新羅と日本との間の敵対関係は次第に強められていったのである。

出雲の地で『出雲国風土記』が勘造された733年は，山陰道節度使が中央政府によって任命された翌年であり，そのため同書には新羅に対する緊張関係の姿が反映されているといわれている。すなわち他の風土記とは異なって，軍団の配備や水軍の基地などについて詳細な記述があるほか，新羅からの渡来神を祀る神社も意図的に抹消されるなど,「新羅に近し」という地理的条件にある出雲の微妙な立場がみられるのであった。[15]

とりわけて737年には，日本から新羅に派遣されて帰国した遣新羅使が,「新羅国常例を失し使旨を受けず」と報告したことから，あらためて使を送って詰問すべしとか，軍勢を出して征伐すべしなどという強硬策が検討され，伊勢神宮をはじめとする諸社に，新羅が無礼の振舞をしたことを報告させたりしたことが『続日本紀』にみえる。したがって，これ以後に来日した新羅の使節は追い返されており，759年には，大規模な新羅征討計画が立てられ，全国に500艘の船の建造が命じられた。このとき山陰道諸国では145艘を分担している。こうして779年になると，新羅と日本との公的関係は断絶し，翌780年には縁海諸国に対して警備を厳にすることが命令された。

『三代実録』によると，866年，清和天皇貞観8年11月17日の勅に，怪異が出現したので占なったところ，新羅の賊兵が日本をうかがっているためとわかり，災変を未然に防止するためには神明の加護に頼らなければならないとして，能登・因幡・伯耆・出雲・石見・隠岐・長門の諸国と大宰府に命じて，領内の神々に祈願をさせた。そして翌867年には，八幡四天王像五舗をつくり，伯耆・出雲・石見・隠岐・長門の五か国に配付，国ごとに四王寺を創建して賊心調伏，災変消却を厳修するように命じた。ここで新羅の賊兵が間隙をうかがうというのは，新羅水軍による進攻ではなく，海賊が出没する状況を意味していた。すでにこの当時，新羅の国力は衰退傾向にあり，918年の高麗建国に至る間は，もっぱら海賊船や商船が活躍していた時代であるといわれている。[16] 新

羅の船と航海技術の優秀性についてはよく知られているところであり，古代における新羅船の海上交通は，想像以上に活発であったと指摘されている。[17]

前隠岐守が新羅人と共謀して反逆を図ったと誣告される事件が起ったのは，869年のことであった。ここで新羅人とは，海賊を意味していたものと思われる。こうした海賊の横行に対処して，中央政府では870年，873年，880年，894年に，それぞれ山陰道諸国を中心にして警備を固めるように命じている。[18] そして906年には，隠岐国の天建金草命に大風を吹かせて新羅の賊船を追い返したという託宣があったことが，隠岐国から中央政府に報告された記録もある。[19]

(5)　新羅からの山陰海岸漂着

9世紀になると『三代実録』や『日本紀略』に新羅からの漂着の記録が増加する。それ以前の時期に漂着した者がいなかったとは思われないが，記録にみえる780年から996年までの216年間の山陰海岸への漂着は，次頁の表に一覧したごとくである。

山陰海岸への外国人の漂着は，新羅と渤海からであった。新羅が緊張関係にあったのに対して，渤海は友好関係をもっていた。しかも渤海の場合は政府派遣の国使であった。渤海使は727年から919年までの192年間に36回の来日を数えるが，着岸地は出羽の7回，加賀の5回，能登の3回と北陸が多く，山陰では隠岐の4回，出雲の3回，伯耆の2回であった。[20] 友好関係にある渤海国使の漂着であれば，手厚くもてなすのも当然であるが，敵対関係にあった新羅人に対しても，手厚く救助して送り返している。もっとも新羅船は商船であり，多人数が乗組んでいた場合が多いが，863年に因幡国荒坂の浜に漂着した57人の新羅人について，『三代実録』は「略々商人に似たり」と報告しているように，九州の大宰府での交易を目的に渡海してきたものが，山陰海岸に漂着したものと思われる。海賊の侵攻に対してはきびしく対処しながらも，漂流民は救助し，食料を与えて帰国させるという人道的措置をとりつづけていたのであった。[21]

表1－1　古代における山陰海岸への漂着

689	持統3	1月9日，出雲国司に風浪に遭って漂着した蕃人を送らせた（日本書紀）
780	宝亀11	3月3日，金銅鋳像一翁，白銅香炉一口，その他出雲国海浜に漂着（続日本書紀）
799	延暦18	遣渤海使が帰途に比奈麻治比売の霊光に導かれて隠岐国に漂着
814	弘仁5	9月，渤海使来着（日本後紀，類聚国史）
825	天長2	12月3日，渤海国使高承祖ら103人隠岐国に到着（類聚国史）
861	貞観3	1月，渤海国使李居正ら150人，隠岐より島根郡に来着（三代実録）
863	〃 5	11月，新羅国人57人因幡国荒坂の浜に来着（三代実録）
864	〃 6	2月17日，昨年石見国美濃郡海岸に漂着した新羅国人30余人，うち死者10余人，生者24人に食料を与えて帰国させた（三代実録）
874	〃 16	6月4日，石見国に漂着した渤海人宗佑ら56人に資糧を給して帰国させた（三代実録）
876	〃 18	1月16日，出雲国に渤海国使着岸，6月25日本国に帰る（三代実録）
888	仁和4	10月3日，新羅国人35人隠岐国へ漂着（日本紀略）
889	寛平1	2月26日，隠岐国に漂着の新羅国人に米塩等を給与（日本紀略）
892	〃 4	1月8日，渤海国使が出雲に来着（日本紀略）
894	〃 6	12月，伯耆国に渤海使来着＜日本紀略，扶桑略記，菅谷文章＞
908	延喜8	1月，伯耆国に渤海使来着＜日本紀略，扶桑略記，本朝文粋＞
942	天慶5	11月15日，新羅船7艘が隠岐国に来着したことを出雲国から報告（日本紀略）
996	長徳2	5月19日，石見来着の高麗人に食糧を与えて帰国させた（小右記）

＜注＞（　）は『新修島根県史』年表篇による。
＜　＞は森・門脇『古代日本海文化の源流と発達』所収「渤海使年表」による。

＜注＞

(1)　李家正文『韓国の文化誌』（泰流社，1986年）p. 12に所収の安東濬「韓族と古代日本王室」(1978）による。

(2)　出雲大社本殿の神座が西向きであることについて，第八十二代出雲国造千家尊統は「出雲族と西方九州方面との関係を考えなければならないであろう。御祭神と海との関係，むすびつきを見なければならないとおもう」(『出雲大社』p. 159，学生社，1968年）と述べるとともに，異国防禦のために西向いであるとする説もあると記している。西の故郷，新羅の国に面していると考えられないであろうかと私は思ってい

る。

(3) 水野佑『古代の出雲と大和』p. 93.（大和書房，1975）。水野氏は，出雲国簸の川上（斐伊川上流）が太原郡で二つの谷，仁多郡で六つの谷に分かれることから，この八つの谷を八岐大蛇の八本の尾とみる説を批判して，新羅系の神であることから慶州の地に八つの谷を求めたのである。

(4) 水野佑前掲書 p. 223。水野氏は「多婆那国」をタバナ，すなわちタバ，丹波であるとして，石見や出雲も含めて山陰海岸全体を「新羅ではダバナと呼んでいたのかも知れない」と述べている。

(5) 金元龍「古代出雲と韓半島」（『環日本海松江国際シンポジウム資料集』p. 18, 1986年）。また全浩天氏は，1986年3月の環日本海松江国際プレシンポジウムの席上で，「延烏郎・細烏女の説話は，新羅の人々が出雲・伯耆・但馬・丹後などの地域に移住し，そこに王権・王国を築いたこと，延烏郎が王として推戴されたことを伝えている」と述べている（全浩天『朝鮮からみた古代日本』p. 137，未来社，1989年）。

(6) 村山正雄「朝鮮関係神社攷」（『朝鮮学報』第49輯，1968年）。

(7) 石塚尊俊「韓国伊太氐神社について」（『日本の神々』第7巻，p. 46，白水社，1985年）。

(8) 荒神谷に一括埋納された銅剣等を，どこで誰がつくったかについては不詳のままで定説はないが，工匠集団が朝鮮からの渡来人を主体としたものであることは，多くの研究者が認めているところである（松本清張編『荒神谷の謎に挑む』p. 225，角川書店，1987年）。

(9) 全浩天「四隅突出型墳墓を求めて―新しく発掘された高句麗の四隅突出型積石塚」（全浩天前掲書所収）

(10)(12) 小田富士雄「弥生青銅器にみる文化交流」p. 56, 187.（『環日本海松江国際シンポジウム報告書』同実行委員会，1987）。なお，1989年の環日本海松江日韓国際交流会議では，「古代仏教寺院跡と渡来文化」と題して，新羅の仏教文化の直接的影響の詳細を山陰の古寺跡から発掘された遺物によって明らかにしている（環日本海松江国際交流会議『日韓交流五千年の歴史と文化』1989年）。

(11) 西谷正「古墳時代にみる文化交流」p. 78（前掲『環日本海松江国際シンポジウム報告書』）。

(13)(16) 内藤雋輔「新羅人の海上活動について」p. 341, 354（内藤『朝鮮史研究』，東洋史研究会，1961年）。

(14) 『続日本紀』（『新修島根県史』年表篇，p. 25）。

(15) 『延喜式』神名帳に記載されている朝鮮系の神を祀る神社だが，それより200年前の『出雲国風土記』では欠落していることについて，八木充「古代出雲と対外交流」で問題が提起されている（前掲『環日本海松江国際シンポジウム報告書』p. 137, 173）。

(17) 東潮「古代朝鮮との交易と文物交流」(『日本の古代』第3巻，p. 300，中央公論社，1986)。

(18) 『新修島根県史』通史篇1，p. 276（島根県，1968)。

(19) 『新修島根県史』年表篇，p. 60.

(20) 上田雄「渤海使の海事史的研究」(『海事史研究』43号，1986年)。

(21) 大和の中央政府は，775年に大宰府に新羅漂流民の保護と送還を命じている。漂流民は，帰化人や被虜，外国商人とは区別して対処する姿勢をとっていた（荒野泰典『近世日本と東アジア』p. 118，東京大学出版会，1989年)。

2. 中世山陰の日朝関係史

(1) 倭寇禁圧の要請

15世紀は，西日本各地で地域レベルの日朝交流が活発に推進された時期である。ここでの国際交流は，日本国を代表する室町幕府を媒介しないで，地方の大名がそれぞれ個別に朝鮮王朝と交渉し，100年近くに及ぶ長期の交流を継続的に積み上げていったことである。ただ関係史料としては，朝鮮王朝による『李朝実録』だけであり，日本側の記録はほとんど残っていない。

この時期に，地域レベルでの国際交流が活発化した背景には，第1に，朝鮮王朝が倭寇対策として西日本各地の大名との通交政策をとったことがあげられる。第2には，「日本国王」である足利将軍家には朝鮮との外交関係を一元化するだけの力がなく，倭寇禁圧にも有効な対策をとらなかったことから，朝鮮側としては倭寇防止の実をあげるために，西日本各地の大名を相手に通交関係をもつことを得策としたが故である。そして第3に，幕府や諸大名はともに朝鮮王朝がもっていた先進的な文物の受容と，交易による利益に大きな期待をかけていたことなどをあげることができる。ただし通交といい，交易といっても，対等平等な経済交流ではなく，日本側が土産をもって挨拶にゆくと，朝鮮国王は相手の未開と従順さをあわれんで，土産品に数倍する物品を下賜するという朝貢貿易であったといってよい。このため将軍足利義満は「日本国王源道義」を名乗り，山陰の諸大名も「藤観心」とか「源鋭」などと中国風（朝鮮風）の

名前で通交に当ったのであった。北島万次氏は，朝鮮王朝の通交政策の特徴を次のように述べている。

「李氏朝鮮の通交政策は前代からの伝統を継承し，中国に対しては事大，近隣諸国に対しては交隣を基本原則としました。この場合，事大とは，勢力の強大なものに従属すること，また交隣とは，たがいに対等な立場にたって交流することを意味します。明は宗主国として東アジアの諸民族に文化を伝えて華夷の世界を形成し，周辺諸国は宗主国としての明に対し，事大の礼をつくす，その礼の原理とは身分の尊卑，上下の秩序をあきらかにすることである。朝鮮はこの考えのうえにたって日本との通交を展開したのです。」[1]

倭寇というのは，高麗や明の史書で使われている言葉で，日本人の海賊行為をいっている。13世紀の20年代にはじまり，14世紀後半期に頂点に達し，高麗王朝を滅亡させた原因の一つにもなったといわれている。倭寇の根拠地は，『李朝実録』が記すように，「三島の倭寇」すなわち対馬，壱岐，そして肥前松浦地方が中心になっており，これに北九州や中国地方西部の海賊が加わっていたとされている。[2] 山陰海岸も例外ではなく，『吾妻鏡』貞永元年（1232）閏9月17日の条には，隠岐国鏡社の住人が高麗に渡って夜討をかけ，多数の珍宝を略奪したことが記されている。『高麗史』に「倭寇」がみられる初出は1223年といわれているから，[3] 初期の段階での倭寇の例といってよい。

倭寇の規模は，船2～3隻から大規模なものは500隻にも達したといわれ，1隻に5～10人が乗り組んでいたから，軍団の海賊行為とみるべきであろう。村落を襲撃して物資を略奪し，住民を捕虜にして連行して帰り，奴婢として売買していた。そのため朝鮮半島南部では，「蕭然一空」とか「千里蕭然」と呼ばれる荒廃を結果したのであった。[3]

この事態のなかで，高麗王朝は倭寇禁圧を要請するために，日本に金龍ら17人を使節として派遣した。金龍らは貞治5年（1366）の8月13日に高麗を出発して，40日余をかけて出雲国杵築に到着する。『太平記』の「高麗人来朝事」には次のように記している。

「四十余年ガ間，本朝大ニ乱テ，外国暫モ不静。此動乱ニ事ヲ寄セテ，山路ニハ山賊有テ，旅客緑林ノ陰ヲ不過得，海上ニハ海賊多シテ，舟人白浪ノ難ヲ去兼タリ。欲心強盛ノ溢物共，以類集リシカバ，浦々嶋々，多ク盗賊ニ被押取テ，駅路ニ駅屋ノ長モナク，関屋ニ関守人ヲ替タリ。結局，此賊徒数千艘ノ舟ヲソロヘテ，元朝，高麗ノ津々泊々ニ押寄テ，明州，福州，財宝ヲ奪取ル。官舎，寺院ヲ焼払ヒケル間，元朝，三韓ノ吏民，是ヲ防兼テ，浦近キ国々数十箇国，皆楢人モナク荒ニケリ。

依之，高麗国ノ王ヨリ，元朝皇帝ノ勅宣ヲ受ケ，牒使十七人，吾国ニ来朝ス。此使，異国ノ至正二十三年八月十三日ニ高麗ヲ立テ，日本国貞治五年九月二十三日出雲ニ着岸ス。道駅ヲ重テ，無程京都ニ着シカバ，洛中ヘハ不被入シテ，天龍寺ニゾ被置ケル，此時ノ長老，春屋，和尚覚普明国師，牒状ヲ進奏セラル」

この『太平記』の記事をもとに,「報恩院文書」などの関連史料を使った中村栄孝氏の研究では[5]，出雲国の杵築に到着したこと，次いで海路をとって伯耆国に行き，伯耆国からは陸路で京都に上ったこと，伯耆国には醍醐寺蓮蔵院領が延保にあったため，高麗使節の上京にかかわったのではないかなどについて明らかにしている。

高麗使節金龍の来日は，室町幕府にとっては最初の外交問題への直面であった。公式の牒状の取扱いについては朝廷の指示を仰ぐが，朝廷でも久しく外国との交渉がなかったために態度決定に手間どった上に，5月になってようやく，返牒は出さないことと使節の送還は幕府に一任することも決定した。返牒を出さないとした理由は，朝廷と幕府の力で九州地方の海賊を禁圧することは不可能であり，その実状を述べることは王化が及ばない姿を表明することとなり，本朝の恥を後世に残す結果になるからというものであった[6]。しかし使節の送還にあたっては，幕府は鞍馬十匹，鎧二領，白太刀三振，御綾十段，絹百段，扇子三百本を贈り，天龍寺の僧梵盪，梵鎰の両名が高麗の都である開京まで同行した。

(2)　朝鮮王朝との通交

14世紀になると倭寇は沿岸部から内陸部まで侵入し，さらにその行動も狂暴化していった。対抗して高麗軍の防倭策も強化され，そのなかから李成桂による新しい朝鮮王朝が，1392年に建国された。李王朝は明国との友好を基本とし，1401年には正式の冊封を得て明国に服属した。そして日本に対しては，倭寇の禁圧を要求するとともに，通交奨励による倭寇懐柔の対策をとることになった。

朝鮮王朝がとった倭寇対策は，(1) 一定の経済的給付と引きかえに投降を促がす（降倭，投化倭），(2) 帰順者に朝鮮王朝での官職を与える（受職倭人），(3) 平和的な交易者とする（興利倭人），(4) 日本の大名の使者という名義で来朝を許す（使送客人）の4種類に分けられる。[(7)] こうした倭寇対策は，『太宗実録』の言葉を借りれば，「島倭面を革え来り朝し，復た商賈通ず」といわれるような，平和的な通交者に倭寇を転身させることによって，倭寇鎮静化に大きな成果をあげるのであった。

山陰地方における15世紀の日朝交流については，出雲，隠岐，石見の関係記事を『新修島根県史』年表篇から抽出して，これに他の資料から補って交流一覧表を作成した。初出は，1408年に朝鮮王朝の通信副使であった李芸が石見海岸に漂着した記事である。しかし，朝鮮から山陰海岸への漂着については，もっぱら朝鮮側の史料を通じてだけであり，日本側の記録，例えば前述した『太平記』にある1366年に高麗使節が出雲に漂着したことなどについては，県史年表にも記載されておらず，今後の精査が必要である。

李芸の石見海岸漂着について『李朝実録』には，「大内殿心を尽し救護」と記されている。山口の大内義弘が，朝鮮王朝に対して正式に通交したのは1395年であり，1399年には義弘から，「大内氏は百済王の後裔であるにもかかわらず，日本ではそのことを信用してくれるものがないので，百済王がもっていた土地を少し分けてほしい」と，朝鮮国王の定宗に申し入れた。定宗は義弘が倭

寇鎮圧に果した役割を高く評価し，「日本六州の牧，左京太夫（大内義弘）百済温祚王高氏の後，その先，乱を避けて日本に仕え，世々相承けて六州の牧に至る，尤も貴顕たり」といって，百済時代の事蹟を調べさせて土地を与えようとした。しかし王朝内部での反対が強く，また義弘が戦死したため，実際には大内氏に朝鮮の土地を与えることは実現しなかった。その大内氏が支配する石見海岸に，朝鮮王朝からの通信副使李芸が漂着したのである。

李芸を救助し手厚くもてなして帰国させた石見国長浜の周布因幡守和兼は，西日本の大名のなかでも特別待遇を朝鮮王朝から与えられたことは，世宗の時代に「受図書人」となったものが，対馬の宗氏のほかには，1445年の肥前の松浦氏，そして1447年の石見の周布氏であったことをみてもわかる。(8)

また，それより前の1425年には，欝陵島に向った朝鮮水軍の張乙夫ら10人が，同じように石見の長浜に漂着した。これを救助した長浜の周布因幡守は，「口料衣袴を給し三十日留む，送るに臨みては大宴を設く」と手厚くもてなし，帰国にさいしては礼曹に書を贈るとともに，環大刀二柄，丹木一百斤，朱紅四面，盤二十，胡椒十斤を献上した。朝鮮国王は大いに喜こんで，返礼として白細帛紬，白紬苧布，黒細麻布各二十匹，正布六十五匹，満花寝席十張，青斜皮五領，紫紱皮三領，豹皮二領，人参二十斤，松子五百斤，清蜜十五斗，乾虎肉全体二を土宜として，周布因幡守に贈ったことが，『世宗実録』にみえる。

このときの周布因幡守による救助と送還は，朝鮮国王世宗にとっては極めて印象深いことであったようで，7年後の1433年になって，世宗から「昔本国使人茂陵へ往き風に遭い倭国に漂う，倭国悉く皆な護恤して起る，予何島の人か忘る」と話題をもちだし，これに対して家臣からは「石見州の人也」「其後一二度本国に来る，本国厚待して送る，近来来らざるは蓋し往来の険に因る也」と答弁したことが『世宗実録』に記録されている。

長浜の周布因幡守藤観心は，1425年の張乙ら10人の救助をした1425年以降，1428年8月，1430年9月，1432年12月と，2年ごとに使人を送って土物を献上している。そして1433年の前述した世宗の懐旧談となる。その後は1437年2月に，1438年になると1月，6月，7月，9月，1439年には1月，4月，5月，

表2－1　中世における山陰大名の朝鮮王朝との交流（『李朝実録』による）

1408	太宗8	戊子の年通信副使李芸，風に遭い石見州に漂到，幾んど死せんとす。大内殿心を尽し救護。
1411	太宗11	6月雲州太守源鋭，人を使し礼物を献ず。
1420	世宗2	かつて風濤の為に漂って雲州安木なる処に抵し，七十余戸の多きに至る。或は寇賊に返却され転伝売買諸島に散在する者，盖し亦甚しく衆しと，返還を要請。
1425	世宗7	風飄船軍平海人の張乙夫ら十人，石見州長浜に登岸，飢困して行得ず，一倭漁来り見て僧寺に率て帰り餅茶粥醬を与へ之を食せしむ。領の順都老我等の衣を見て曰く。朝鮮人也と，再三嗟嘆して口料衣袴を給し三十日留む。送るに臨みては大宴を設く。石見州長浜因幡守書を礼曹に致し曰く，今年九月貴国十名風飄にて此に至る。即時船を治し護送して対馬島都萬戸へ転送す。併せて環刀二柄，丹木一百斤，朱紅四面，盤二十，胡椒十斤を献ず。
1426	世宗8	2月，石見州長浜因幡守の書に云う，本国遭風人十名の厚恤送還と礼物の献上を謹んで啓達するや，上甚だ之を喜び，白細帛紬，白細苧布，黒細麻布各二十匹，正布六十五匹，満花寝席十張，青斜皮五領，紫叙皮三領，豹皮二領，人参二十斤，松子五百斤，清蜜十五斗，乾虎肉全体二を土宜せしむ。 11月，石見州周布因幡刺史藤観心書紀景雅を遣わして書を奉じ賜物を謝す。 （周布因幡守は，この後も1428年8月，1430年9月，1432年12月，1437年2月，1438年1月，6月，7月，9月，1439年1月，4月，5月，11月と使人を派遣して土物を献じている）
1428	世宗10	1月，雲州太守源鋭書を致し礼曹に曰く，十有余年音信を絶ち礼儀を忘れるを恐る。故に使節を専にし，不腆の物を奉献すと。礼曹答書に曰く，旧好忘れずと。
1431	世宗13	出雲州見尾関処松田備前太守藤原朝臣公順，遣使来賀。
1433	世宗15	上曰く，前比は倭客の来る甚だ多し，近頃は前に如かずと。申商曰く，九州兵乱相誅して戦うにより来往稀なり。上曰く。昔本国使人茂陵へ往き風に遭い倭国に漂う，倭国悉く皆な護恤して起る，予何島の人か忘る。商曰く，石見州の人也。上曰く，其後相通ず乎と。答えて曰く，其後一二度本国に来る，本国厚待して送る，近来来らずは盖し往来の険に因る也。
1438	世宗20	6月，石見州周布兼貞，道山等六人を遣す。

1447	世宗29	5月，石見州周布因幡刺史藤兼貞人を遣わして土物を献じ図書を賜るを請う，之に従う。 （1450年10月，1451年10月，1452年6月，1453年7月，1455年6月，同年7月，1461年7月，1463年7月，1464年7月，1465年10月，1468年10月，1470年7月，9月，1472年3月，1474年10月，1475年10月，1477年2月，同年5月，1478年7月，1479年6月，1482年10月，1484年2月，同年12月，1489年3月，1490年3月，同年12月，1492年3月，1493年2月，1494年3月に，石見州藤原周布左近将監和兼が人を遣し土宜を献ず）
1467	成祖13	出雲州見尾関松田備前守公順，美保関郷盛政，石見州益田守久直，石見州三住正教，石見州北江津太守吉久が使船を送った。
1469	睿宗1	伯耆州太守緑野義保，出雲州留関海賊大将藤原義忠，隠岐州太守源秀吉が使船を送った。
1470	成宗1	9月，一年に一両船を以て定約，石見州周布和兼石見の土屋賢宗が通交

<注> 内藤雋輔「中世外国史料に見える出雲石見」(『郷土石見』第1号)，杉原隆「日朝交渉史における山陰海岸の位置」（島根県高校教育研究連合会『研究紀要』第13号)，杉原隆「日朝交渉史における山陰海岸の位置・補遺」（島根県立大田高等学校『研究紀要』第8号）より作成。

11月と，年4回の通交を行なっている。次いで1447年5月には,「石見州周布因幡刺史藤兼貞，人を遣わして土物を献じ，図書を賜るを請う，之に従う」とあり，長浜の周布因幡守は，朝鮮王朝の礼曹が発行する「図書」を受けて交易に従事する。いわゆる「図書貿易」と称する交易はここからはじまる。周布氏が対馬の宗氏，肥前の松浦氏に次いで「受図書人」となったことについては，前述した通りである。こうしてこの後に周布氏は，1450年10月から1494年3月までに29回の交易を行ったことが記録されている。

周布氏のほかに，石見国では桜井津の土屋賢宗，北江津太守吉久，益田守久直，右馬頭正教などが，朝鮮王朝に使人を送ったことが朝鮮の『海東諸国紀』に記されている。(9)

出雲国では，1411年6月に雲州太守源鋭が「人を使して礼物を献ず」とあるのが最初であり，1428年1月には,「雲州太守源鋭書を致し礼曹に曰く，十有余年音信を絶ち礼儀を忘れるを恐る。故に使節を専にし，不腆の物を奉献すと，礼曹答書に曰く，旧好忘れずと」あるが，その後については記録にみられな

い。ただ『海東諸国紀』には,「出雲，隠岐の将が朝鮮と交易」とあり，1469年にも同じ記事がみられる。

また『海東諸国紀』には，出雲国の守護職であった京極持清が1458年に，その家臣の多賀高忠が1470年に，それぞれ朝鮮王朝に「遣使来朝」したことが出ている。このほか『朝鮮通交大紀』には1581年に，『続善隣国宝記』には1584年に修好したとみえる。[10]

美保関を根拠とする出雲国の交易者には，郷左衛門盛政，松田備前守公順，海賊大将義忠の名前が『海東諸国紀』には掲載してあるが,かれらについては，かつて『島根県史』で「此等は平和的態度を持せる倭寇の一と見るべきものにして，朝鮮人寿藺の護送と称し，或は観音出現を賀する等の礼辞を以て彼等の歓心を得て通商を営み」と性格づけるコメントをしていた。[11]

「称寿藺護送，遣使来朝」と朝鮮人を送っていったのは丁亥年（1468）であり，美保関の郷左衛門盛政のほか，前述した石見国の益田守久直，右馬頭久直も同じ年に同じ理由をあげて使人を送っている。このことに関連して『海東諸国紀』には，雲州安木に漂着して帰国しないままになっている70余戸について，朝鮮に返してほしいと1420年に要請したことが記してある。この場合は漂着であるが，倭寇は米穀の略奪とともに朝鮮人を俘虜として連れ帰っていたため，朝鮮王朝からは繰り返し俘虜の返還が求められていた。そして朝鮮人俘虜を送還して大蔵経や綿布などを受けとることが重要な交易手段になっていたことを想起すると，[12]漂流者の送還も地方大名にとっては，交流のための契機になっていたものと思われる。

隠岐国では，1469年に隠岐州太守源朝臣秀吉が，1471年には隠岐州守護代佐々木尹左近将監源栄凞が，朝鮮王朝に「遣使来朝」したことが『海東諸国紀』にみえる。隠岐では焼火神社文書のなかに，永禄6年（1562）9月吉日の隠岐幸清の寄進状で「就中於乗船渡海之上者受順風自在之快楽,至異俗入境之砌者，与逆浪不意之災難，当国安穏」とあり，順風で異国入津することを祈願しており，朝鮮との交流があったことを示[13]している。

しかしながら朝鮮政府にとって，無制限で通交を拡大することは，和寇政策

のためとはいっても限界があることは当然である。答礼の賜物ということで，朝鮮の米穀や綿布が大量に流出しただけでなく，使人を迎え応接のために使う経費の財政負担は大きかった。日本からの使人の滞在費用の一切は朝鮮側が負担しており,「倭人上京道路」の周辺では夫役に堪えられなかった農民が,「奔走失農，漸以流亡」といわれるような状況を結果していた[14]。したがって，通交の利益は双方にあるにしても，そこには自らする制約が生じ，16世紀に入るとその規模は縮少されてゆくことになる。なかでも通交の拡大を防止しようとする朝鮮王朝に対して，通交に大きな利益を認めていた日本側との利害が対立して起されたのが，1510年の三浦の乱であり[15]，これが画期になって通交の規模は縮少されていった。

山陰地方で15世紀の朝鮮貿易の跡は，地名や文化財として僅かではあるが残されている。周布因幡守の石見国長浜（現，浜田市）については,「右岸の平野は当年の城下町にして，此田圃中に鍛冶屋町，トツシンケン，市ノ前等の字を存す，鍛冶屋町は周布家の刀剣工の住みし町の遺名なり，トツシンケンの字義明ならず，朝鮮語系にあらざるか[16]」と『島根県史』は記している。また出雲国の広瀬では「能義郡飯梨村の南境広瀬町に接近する丘谷に字唐人谷ありて，…此地には富田城築造の際唐人の瓦師来往せし処なりと言ひ伝ふ[17]」とみえる。

長浜の鍛冶屋町には，最盛期の15世紀に百数十人の刀工がいたという。刀剣は武器として必要であっただけでなく，朝鮮に対する最重要な輸出品になっていた。また，浜田市日脚の天上岡八幡宮には，朝鮮伝来といわれている獅子頭一面が襲蔵されている[18]。

(3) 秀吉の朝鮮出兵と山陰

豊臣秀吉は，文禄元年（1592）に15万人余，次いで慶長2年（1597）には14万人余の大軍でもって朝鮮に出兵した。日本では「文禄・慶長の役」といい，韓国・北朝鮮では「壬辰倭乱」と呼んでいる。

秀吉の命をうけて山陰各地の諸大名は，すべてが兵を率いて参戦した。『太閤記』巻第十三の「朝鮮国御進発之人数帳」によると，因幡国からは宮部兵部

之輔 1,000 人，木下備中守 850 人，垣屋新五郎 400 人，亀井武蔵守1,000人で，伯耆国で三郡を支配する南條元忠は，幼少のため叔父の南条左衛門督が 1,500 人を率いて出兵し後方守備に当った。伯耆と出雲，隠岐の三国で11万石余をもつ出雲国富田城主の吉川広家は，5,000 人の軍を率いて毛利輝元の軍に属して出陣した。石見国の諸将も毛利の軍であった。[19]

吉川広家の軍の「活躍」については，『鳥取県史』が吉川家文書を使ってまとめている。すなわち，文禄元年(1592) 4 月には釜山浦に上陸して慶尚道に進出，7 月には全羅道を経略，8 月22日には戦功により豊臣秀次から賞を得た。翌 2 年 2 月 5 日付で秀吉が出雲富田の留守居に宛てた朱印状には，朝鮮に出陣した船頭水夫の過半が病死したので，領内の浦々から新しく船頭を徴発するように指示している。しかし 2 月12日に，広家は京畿道幸州山城の戦闘で負傷，9 月21日に帰国する。そして文禄 3 年の夏には再び出陣，その冬には虎を生け捕りにして秀吉に献じて喜こばせた。秀吉は養生のため塩漬の虎肉を送るように広家らに求めている。4 年 4 月22日には，豹を献じた広家に対して喜こんだ秀吉が朱印状を出している。[20]

つづく慶長の役では，慶長 3 年（1598）1 月の蔚山籠城戦で大活躍をして加藤清正を救援，清正から自らの馬幟を贈られた。秀吉からも綾小袖，染道服の賞賜を受けた。また，秀吉が首級の代りに鼻を切り取って塩漬をして送らせたことにかかわって，慶長 2 年秋の吉川家文書には，9 月 1 日に480，4 日792，7 日358，9 日641，11日437，17日1,245，21日 870，26 日 10,040，10 月 9 日 3,487，合計 9 通18,350の鼻の請取状が，いまも岩国の徴古館には残っている。[21] 首級に代えて鼻にしたことについて，柳成龍の『懲毖録』には，「およそわが国人を得れば，ことごとくその鼻を割き，以て威を示す」とあるように，秀吉は「老若男女僧俗に限らず，賤山がつに至るまで普く薙切て首級を日本へ渡すべきものなり」と命じたという。非戦闘員の一般民衆まで含めての無差別の皆殺しという暴挙を行ったのであった。

因幡国で 1 万石を領していた鹿野城主の亀井武蔵守茲矩は，文禄の役で出兵

の時に，秀吉から琉球国を与えると約束してもらっていたため，慶長の出陣には，琉球国を征討すべく兵船5隻で進発した。しかし名護屋城で，秀吉から水軍として朝鮮出兵を命じられ，巨済海で李舜臣が率いる朝鮮水軍と戦って敗れ，秀吉から貰っていた「琉球守殿」と書かれた金色の軍配を紛失したという。船を焼かれた亀井の軍は，上陸して蘇川城にこもり，のちに東古都城，機張城，ウイナゴン城，チャバン城を転戦した。なお，茲矩も文禄元年（1592）11月21日に大虎を殺して秀吉に送っている。[22]

石見国津和野城主の吉見元頼の出陣については，家臣の下瀬七兵衛による『朝鮮渡海日記』を通じて知ることができる。[23]

吉見の軍は，文禄元年（1592）3月8日に津和野を出発，4月13日に名護屋到着，そして5月7日に釜山に上陸，毛利元康の軍に従って各地を転戦，開城まで進撃した。なかでも文禄2年1月21日には，毛利軍は漢城ソウルに集結，26日より明軍を相手に戦闘をはじめるが，日本軍は長期の滞陣で兵粮不足となり，2月27日には「在京御談合之趣は兵粮無候間，先釜山海迄引のき候て彼より太閤様へ注進を遂げ帰朝の由あるべく御議定候」というところまで追い詰められる。そして3月10日には，「都東大門口より四五里先へ兵粮取に御出馬…唐人は逃散仕て兵米一円に無之候」とあり，11日と12日には「兵米取」のことが記されている。

このようなきびしい滞陣中の3月18日，吉見元頼が「南無阿弥陀仏」の六字の名号をとって連歌を詠んでいるが，日記に書き留めた下瀬七兵衛は，「かやうにおのおのよみてなけく計り也」と，戦争のむなしさ，はかなさを述べている。

南　なへて世にさることはりのゆきと花
　　ちらすな春のなけきをはせん　　宗　七
無　むらさきの雲の上まてうかひしを
　　さきたちぬると見るそはかなき　　六太夫
阿　あわれたゝ消にしあとのおもひ草

涙の袖をいつかはれまし　元　頼

弥　見渡せは花はちりつゝ春風に

つれなく残る身こそつらけれ　理　介

陀　たゝひとり若木の花のいたつらに

夢となりしを聞そはかなき　久　内

仏　ふたかたにひき別れつる去年の春を

なかきわかれと今そしらるゝ　寺助右

六字一結なり

そして吉見の軍も，秀吉の死により4月7日に引き揚げていった。

(4)　強制連行と唐人窯

韓国の高校国史教科書は，壬辰倭乱について「東アジアの文化的後進国であった日本は，わが国から活字，書籍，陶磁器，絵画などの文化財と人材を略奪していき，朝鮮の性理学が伝わって，日本文化の発展に大きな影響を与えた」と記してある。[24] たしかに，朝鮮に出兵した各軍は，いずれもが多数の朝鮮人を強制連行して帰国したのであった。

石見国長浜の永見氏隆は，「征韓の役に出陣し，帰朝の際朝鮮人李陶仙，金陶人を連れ帰り，那賀郡大内村内田に居らしめ製陶せしむ，其所を唐人ケ内（今，唐人河内と転す）といふ」と『島根県史』にみえる。名産の長浜人形は，文化年間（1804～1817）にはじまったといわれているが，長浜の製陶業の祖とされている。[25]

津和野の吉見元頼も陶工を連行し，鹿足郡柿木村に唐人窯を開かせた。「文禄・慶長の役において，吉見軍に加わって従軍した斉藤市郎左衛門が，蔚山籠城の際捕えた李郎子を，戦終ってこちらに連れ帰り，杉ヶ峠の近くに住まわせ陶器を焼かせた。これをだれいうとなく，後世唐人屋と呼ぶようになった。」[26] 窯跡は，昭和56年（1981）に発掘調査が行われ，階段状連房左登り窯と確認され，柿木村の文化財に指定保存されている。なお，李郎子は1661年に死亡し，その墓も残っている。

また，萩焼の三輪休敬は，系図「三輪家伝書」に，父親が朝鮮人であると記し，朝鮮役で宍戸河内様御先祖が帰陣の節召し連れ，石州に居住して陶器細工をしていたが，父の死後，毛利氏の萩への退転とともに萩に移って陶窯を開いたという。[27]

また，鳥取城主の宮部法印は朝鮮人を連行して帰国，当初は奴僕として使役していたが，のちに解放され，鳥取の城下で成功して商人になったと『因幡民談記』は記している。

「兵部少輔殿，朝鮮ヨリ朝鮮人余多奪ヒ取リ玉ヘトモ，此方ノ使役奴僕ニモ仕ヒ難ク，城下ニ放シ置キ玉ヘトモ，身ヲ養フ道モ知ラサレハ，不便ナル有様ナル故，此ノ高麗人トモ五六人ヲ許シ，米ヲ歩持ニシ，銀山木戸ノ内ヘ入レサセ玉ヘハ，外ニテ賤キ米ヲ買ヒ担ヒ入レ，内ニテ値ヲ高ク売リ，虚日ナク運ヒシカハ，程ナク富有ニナリ，後ニハ皆城下ニ住シ，大キナル商人ニ成リニケル，今ノ市鄽ノ内ニ於テ，海老屋，綿屋，対馬屋，炭屋杯云フ者，此者トモノ末ナリトカヤ」[28]

強制連行した朝鮮人の多くは農村に送り込んで農業労働力として使役したが，彼らについて中村栄孝氏は，「逃亡して帰国をはかるものも続出したが，土着定住した人びとは改名して同化し，日本人との通婚も少なくない」と指摘している。[29] この問題は，徳川幕府になって朝鮮王朝との間で外交関係を再開するにあたり最大の課題とされ，通信使も俘虜の刷還を求める「刷還使」として第3回まで派遣されつづけたのである。　　（未完）

＜注＞

(1) 北島万次「中世の日朝関係」p. 83.（歴史学研究会編『日朝関係史を考える』青木書店，1989年）。

(2) 田中健夫『倭寇』p. 15.

(3) 『島根県史』第6巻，p. 710.（島根県，1927年）。『吾妻鏡』貞永元年閏九月十七日の条には，「鏡社住人渡高麗，企夜討，盗取数多珍宝，皈朝之間…」とある。

(4) 佐々木銀弥『日本の歴史，第13巻，室町幕府』p. 286.（小学館，1975年）。

(5) 中村栄孝『日鮮関係史の研究』上巻，p. 203 以下（吉川弘文館，1965年）。

(6) 佐藤和彦『日本の歴史・第11巻，南北朝内乱』p. 292.（小学館，1974年）。

(7) 田中健夫『中世対外関係史』p. 95.（東京大学出版会，1975年）。

(8) 中村栄孝前掲書，下巻，p. 25.

(9) 申叔舟の『海東諸国紀』には，石見国の関係記事が次のように記してある。

和兼周布兼貞之子，丁卯年親来受図書，書称石見州因幡守藤原周布和兼約歳遣一艘

賢宗庚寅年遣使来朝，書称石見州桜井津土屋修理太夫平朝臣賢宗

久直丁亥年称寿藺護送，遣使来朝，書称石見州益田守藤原朝臣久直

正教丁亥年称寿藺護送，遣使来朝，書称石見州住右馬頭源朝臣正教

吉久戊子年称寿藺護送，遣使来朝，書称石見州北江津太守平朝臣吉久

（『島根県史』第7巻，p. 840，島根県，1928年）

(10) 『島根県史』第8巻，p. 836.

(11) 同上書　p. 839. 郷左衛門盛政の場合は，「称寿藺護送，遣使来朝」とあり，松田備前守公順については，「遣使来賀観音現像」とある。

(12) 倭寇が俘虜を奴隷として連行してきた背景には，俘虜を西日本の諸大名に引渡して米銭などを受とり，諸大名はその俘虜を送還することによって，彼らが欲する大蔵経や綿布を入手する「黒いからくり」があったことが指摘されている（佐々木銀弥　前掲書　p. 290）。

(13) 『島根県史』第8巻，p. 843。なお，同書には天正十三年（1585）七月七日簾宗次郎より焼火神社別当にあてた寄進状にも同じ文言がみられる。

(14) 村井章介『アジアのなかの中世日本』p. 324.（校倉書房，1988年）

(15) 「三浦の乱」とは，朝鮮政府による通交制限や圧迫に不満をつのらせた三浦（富山浦，乃而浦，塩浦だけが制限貿易の開港場として認められていた）の倭人海商が，対馬の宗氏の支援を得て起した暴動をいう（中村栄孝前掲書，上巻，p. 621～728）。

(16)(17) 『島根県史』第8巻，p. 841，p. 839.

(18) 浜田市教育委員会『浜田の文化財』p. 34，39.（1977年）。

(19) 小瀬甫庵『太閤記』p. 65.（岩波文庫版下巻）

(20) 『鳥取県史』2　中世，p. 500，p. 504.（鳥取県，1973年）。なお，吉川広家の朝鮮での「活躍」については，正徳2年（1712）に刊行された『陰徳太平記』のなかに，「吉川広家筧銑軍之事」「朝鮮都河下之城攻事」「虎狩之事」「蔚山後詰付大明勢敗北並吉川広家先陣ノ事」「加藤清正馬幟被附与吉川広家事」「高麗城番石田安国寺讒広家事」などとして詳細が記してある。このほか，吉川軍に参加した三刀屋孝和，赤穴元寄，山内隆通，熊谷元実，都野家頼らについては，『島根県史』第8巻を参照。

(21) 藤井久志『日本の歴史，第15巻，織田豊臣政権』p. 373.（小学館，1975年）。吉川軍に属した赤穴元寄は，365の鼻を切って吉川広家に渡したという―「赤穴元寄も亦鼻数三百六拾五を吉川広家に渡したるにつき，広家之を請取り豊公の奉行に渡したる

趣…三百六拾五の鼻は吉川勢の取りし鼻数一万八千余の内なり，此の鼻を埋めたる塚は現時洛東に存するは世人の悉知する処なり」(『島根県史』第8巻，p. 616)。

(22) 『鳥取県史』2，中世，p. 504. 亀井の水軍21艘は文禄元年6月2日に唐浦の海戦で李舜臣の亀甲船隊に完敗した（『日本の戦史5一朝鮮の役』徳間書店，1965年，p.144)。また，東萊城の守備に当っているときにしとめた虎を秀吉に献上して喜こばれ，その後の日本将兵の虎狩の起源になったといわれている（同上書p. 43)。

(23) 防長叢書第6編『朝鮮渡海日記』(防長史談会，1934年)。なお北島万次『朝鮮日々記・高麗日記一秀吉の朝鮮侵略とその歴史的告発』p. 152 以下（そしえて，1982年）では，下瀬七兵衛の『朝鮮渡海日記』を援用しつつ戦争の経過を記述している。

(24) 尹学準監修『韓国の教科書の中の日本と日本史』p. 131.（一光社，1989年)。

(25) 『島根県史』第9巻，p. 744.

(26) 『柿木村誌』第1巻（島根県鹿足郡柿木村役場，1986年)。

(27) 内藤雋輔『文禄慶長役における被擄人の研究』p. 762.（東京大学出版会，1976年)。

(28) 『因幡民談記』所収の「巨濃郡三月山銀出事」

(29) 中村栄孝　前掲書　下巻，p. 280.